『大乘義章』『仏性義』における「行性」について

岡 本 一 平

【一】

本稿の目的は「行性」の語と概念を考察し、「行性」をめぐる諸問題について問題提起することにある。「理性」「行性」は、主に中国法相宗の諸学僧が、経論に説示される用語を解釈する上で、採用した術語として知られている。例えば、基（六三—六八二）は、『妙法蓮華經玄贊』巻一本において次のように述べている。

①此經既說一乘被彼大乘根性。然性有二。一理性、勝鬘所說如来藏是。二行性、楞伽所說如来藏是。前皆有之。後性或無。該有藏無說皆作仏。依善戒經・地持論中、唯說有二。一有種姓、二無種姓。彼經論云、性種姓者、無始法爾、六処殊勝、転展相統。此依行性、有種姓也。無種姓人、無種姓故、雖復発心勲行精進、終不能得無上菩提。但以人天善根、而成就之。即無性也。此被有性非被於無。此行性以說有無。（大正藏三四・六五六上—中）
この記述①によれば、基は「大乘根性」を「性」と略称

し、その「性」を「理性」と「行性」とに区別している。このうち「理性」は一切衆生に有り（前皆有之）、「行性」は有る人もいれば無い人もいる（後性或無）とされる。そして、經典が「作仏」と説示したのは、「行性」有る人について語り（談有）、「行性」無き人を蔵した（藏無）上でのこと解釈している。私の理解よれば、基の「理性」は、一切衆生に遍満している「真如」であり、「作仏」とは無関係な概念である。また「行性」は特定の人だけに有る「作仏」に関わる概念である。このうち「行性」は、「種姓」と同一視されている（此依行性、有種姓也）。記述①には「五性各別」説そのものは見出せない。しかし、特定の衆生にだけ有り、「作仏」という果をもたらず「行性」＝「種姓」は、「五性」中の菩薩種性を予想させる概念である。さて、基が「行性」の典拠とした『楞伽經』『善戒經』『菩薩地持經』には「行性」の語はない。このことは既に知られている。また法相宗の諸学僧が依拠する玄奘訳経論の中にもない。現在知られている限り、「行性」

という語の最古の用例は、淨影寺慧遠（五三—五九二）の『大乘義章』『仏性義』にある。近年、吉村誠氏が慧遠の「行性」説を検討しているが、^①未だ考察すべき余地があると私は考える。そこで「仏性義」における「行性」を吟味して、「理性」「行性」について問題提起をしてみたい。

二

『大乘義章』『仏性義』における「行性」の用例は二箇所である。第一例目の記述②は、「仏性義」「弁体二」中の「性」を十種の範疇より分別する段（性の十分説）と仮称）の冒頭である。

②如宝性論說性為十。一者体性、二者因性、三者果性、四者業性、五相応性、六行性、七時差別性、八遍処性、九不變性、十無差別性。彼論偈言、体及因果業、相応及与行、時差別遍処、不變無差別。（大正藏四四・四七四下）

この記述②〈性の十分説〉は、勒那摩提訳『宝性論』『一切衆生有如來藏品第五』における如來藏の〈十義〉を下敷きにしていることは一目瞭然である。ここで問題にしたいのは第六番目「行性」である。記述②の「行性」は二つの点より重要である。第一には、「行性」という語を用いる文献中最古の用例ということである。第二には、「行性」中の「行」の典故を明示する唯一の用例ということである。如來藏の〈十義〉

『大乘義章』『仏性義』における「行性」について（岡 本）

とは、如來藏を十種の範疇より分別したものである。^②〈十義〉

の各原語は、既に高崎直道氏が明示している。そこで漢訳語と原語とを併記して〈十義〉を示せば、(1)「体 (svabhāva)」(2)「因 (hetu)」(3)「果 (phala)」(4)「業 (kamma)」(5)「相応 (yoga)」(6)「行 (vri)」(7)「時差別 (avasthā-prahēda)」(8)「遍処 (sāmanāgata)」(9)「不變 (avikāra)」(10)「無差別 (abheda)」である。^③『宝性論』への遡及によって、〈性の十分説〉の各語は、〈十義〉の各語尾に「性」の一字を加えた慧遠の造語であることが判明する。今問題にしている第六番目「行性」中の「行」の原語は vri である。この vri の辞書上の意味は、^④“rolling”「転がること」「行為の過程」「起こる（こと）」等の意味であり、私は「転じる（こと）」「動く（こと）」と理解する。次に「行性」の「性」の原語はおそらく dhātu で良いと思われる。その理由は、記述②は「仏性義」の用例であり、「仏性」の原語は buddha-dhātu が最も一般的だからである。また、もう一つの理由は、『宝性論』『教化品第一』における「七種金剛句」にある。周知のように「七種金剛句」は『宝性論』の主題を七語によって略説したものである。そのうち、「性 (dhātu)」を詳解したのが「一切衆生有如來藏品」なので、『宝性論』は「性 (dhātu)」を「如來藏 (vāḥgagarbha)」と解釈したといえる。以上の検討によって、「行性」の語は、「行 (vri)」の語尾に「性 (dhātu)」を付した慧遠の造語とい

える。

次に、「行性」の第二例目を検討し、「行性」の概念を解明してみたい。

③言行性者、行別有三。一妄見凡夫起顛倒見。二実見聖人離妄想心。三者如来無戲論習。三行雖殊・性体不二。其猶種・穀牙・莖等異・般性無別。就行弁性、故云行性。故彼論言、不見実者説言凡夫、聖人及仏、能見衆生如来藏中真如無差別。（大正藏四四・四七五中）

この記述③によれば、「行性」とは、「性」が「凡夫（*prthag-jana*）」「聖人（*arya*）」「如来（*sambuddha*）」の三者に「転じる（行）」という様態において異なるが、その「性体」は一つである（三行雖殊、性体不二）とされる。つまり慧遠の「行性」説は、「凡夫」「聖人」「如来」の差別性と同一性を示す概念である。如来藏思想を根本的立場とするならば、三者に本質的な区別を認めることは不可能であろう。この記述③の「行性」が、〈十義〉の(6)「行（*virtu*）」の内容を下敷きにしていることはいうまでもない。この三者のうち、「聖人」は、慧遠の「時差別性」、あるいは「宝性論」の(7)「時差別」を参照すると「菩薩」である。基が「行性」を「種姓」に再解釈できたのは、「行性」の「聖人」が「菩薩」であったことも理由となる。

【三】

「行性」の語と概念の典拠は『宝性論』である。ここで疑問が生じるのは、なぜ基が如来藏思想に由来する「行性」を導入し「種姓」論の立場から再解釈したのか、ということである。法相宗の中心的な論典『成唯識論』には種姓の問題があるとはいえ、如来藏思想を根本的立場とするものではない。記述①で、基は確かに二種の「如来藏」を認めている。しかし、「如来藏」という術語を使用するが、基は如来藏思想家とはいえない。「如来藏」の語の使用と、如来藏思想家であることは全く別な問題である。ではなぜ基は「行性」の語を導入したのか。まず瑜伽行派文献における *virtu* の用例を検討しておきたい。そもそも『宝性論』における「如来藏」の〈十義〉は、『大乘莊嚴經論』『菩提品第十』における「清浄法界」の〈六相〉を展開したものである。その意味では、「行（*virtu*）」「行性」の淵源は如来藏思想ではなく、瑜伽行派の思想にある。ただし内容は大きく異なる。また『仏地経論』にも類似した〈六相〉は確認される。親光菩薩等造・玄奘訳『仏地経論』における〈六相〉の総説に相当する箇所を引用する。

④復有義者。此中顯示清浄法界。有六種相。総摂一切仏地功德。謂目性相、因相、果相、若作業相、若相応相、若差別相。（大正藏二六・三二二下）

『仏地経論』には梵本がないが、「清浄法界」の六相の漢訳語は、「十義」の前六義と同じ原語であったことを予想させる。また、無著菩薩造・波羅頗密多羅訳『大乘莊嚴經論』『菩提品』（大正蔵三一・六〇六上—中）における「清浄法界」の〈六相〉の漢訳語と原語は、(1)「性」(*svabhāva*)、(2)「因」(*hetu*)、(3)「果」(*phala*)、(4)「業」(*karma*)、(5)「ナシ」(*vyagā*)、(6)「位」(*vyūhi*)である。漢訳語の差異はあるも、この〈六相〉と先の〈十義〉との前六つの原語は同じである。ここで問題を六番目の「差別」と「位」(*vyūhi*)に絞れば、『仏地経論』（大正蔵二六・三三五下）も『大乘莊嚴經論』（大正蔵三一・六〇六上—中）も *vyūhi* の規定は「如来の三身」である。記述④によっても明白なように、「清浄法界」とは「仏地」を解説する概念である。従つて、「清浄法界」の「差別」「位」は、「清浄法界」が「転じる」といつても、あくまで「如来の三身」に「転じる」のであり、如来蔵思想の「行」「行性」のように衆生そのものには転じない。これでは「種姓」による再解釈は不可能である。「自性」「性」(*svabhāva*)の規定によれば「清浄法界」は「真如」である。伝統的に法相宗の思想は「性相決判」「真如凝然」と称される。やはり瑜伽行派の正統説における「清浄法界」「真如」は衆生に「転じる」ことはない。これに対して、如来蔵思想は「性相融會」「真如随縁」と称される。「如来蔵」「真如」は、衆生そのものへと「転じる」

『大乘義章』『仏性義』における「行性」について（岡 本）

のである。如来蔵思想と瑜伽行派の正統説とは共に真如の一元論でありながら、一なるものが「転じる」か「転じない」という点において両思想は大別されると考える。既に松本史朗氏と袴谷憲昭氏は、両思想の類似性を指摘しているが、私は両氏の見解を基本的に追認したいと考える。伝統的な仏教諸思想において、一なるもの、常住なものを認めることがある。例えば、説一切有部における「虚空」であり、瑜伽行派における「清浄法界」である。これらは、インド諸思想の「我」(*ātman*)に類似する概念であるが一定の差異もある。それは、基本的に仏教思想に導入された常住なものは文字通り「転じない」「動かない」のである。しかし、如来蔵思想のようになんか常住なものが衆生へ「転じ」「動く」とすれば、インド諸思想の「我」との区別はつけ難くなるであろう。

【四】

基を代表とする法相宗において、多くの経論に説示された「如来蔵」「仏性」という語は厄介な問題であった。彼ら自身が如来蔵思想に立脚しないにも関わらず、その解釈を提示する必要があるからである。その解釈の上で「理性」と「行性」の二語は都合が良かった。なぜならば、法相宗において重要な「性」(*dharma*)「真如」(*caṭvāra*)と「種姓」(*gotra*)との区別を読み込むことが可能だったからである。しかし、慧遠

『大乘義章』「仏性義」における「行性」について（岡本）

を代表とする如来蔵思想家にとって「理性」も「行性」も同じ仏性の一側面にすぎない。彼らは、法相宗の「理性」＝「性」(dharma)「真如」(satyā)と「行性」＝「種姓」(gotra)の区別に反論し、日本では最澄と徳一の論争へと展開する。しかし、両者ともに「真如」を代表とする一なるもの、常住なものを容認した上での論争なのである。¹¹その「真如」が衆生へ「転じる」か否かという問題は、仏教思想にとって中心的なものでありえないだろう。なぜならば、仏教思想は一元論でも、常住論でもないとは私を考えるからである。¹²

- 1 吉村誠「唯識学派の理行二仏性説について―その由来を中心に―」『東洋の思想と宗教』一九号、二〇〇三年三月、橘川智昭「円測による五性各別の肯定について」『仏教学』四〇号、一九九九年三月 参照。
- 2 Jikido Takasaki "A Study of the Ratnagotravibhāga" pp. 400-407 (Roma, 1966) 「法身の一元論―如来蔵思想の法観念」(『平川彰博士還暦記念論集・仏教における法の研究』春秋社、一九七五年) 参照。
- 3 高崎直道『如来蔵思想の形成』(春秋社、一九七四年) 二三頁参照。『宝性論』(大正蔵三一・八二八中)。
- 4 Monier Williams "Sanskrit-English Dictionary" Oxford University Press, London, 1899, p. 1010 荻原雲来編纂『梵漢大辞典』(講談社、一九七六年) 一二七〇頁。
- 5 『宝性論』(大正蔵三一・八二〇下)。

6 『宝性論』(大正蔵三一・八三二下―八三二上)。

7 袴谷憲昭「清浄法界」考(同著『唯識思想論考』所収、大蔵出版、二〇〇一年八月) 参照。

8 『仏地経論』(大正蔵二六・三三二下)、『大乘莊嚴經論』(大正蔵三一・六〇六上)。

9 松本史朗「瑜伽行派と ālaya-vāda」(『仏教思想論(上)』所収、大蔵出版、二〇〇三年三月) 五五―六一頁、前註(7) 袴谷論文七六―七六八頁参照。

10 前註(9) 松本論文六五―六六頁参照。

11 袴谷憲昭『日本仏教文化史』(大蔵出版、二〇〇五年一二月) 一二三―一二六頁参照。

12 拙稿『大乘義章』の研究(二)―「仏性義」註釈研究(『駒澤短期大学仏教論集』一二号、二〇〇六年十月刊行予定)、拙稿「清浄法界と如来蔵―理性・行性の思想背景」(『駒澤大学仏教学部論集』三七号、二〇〇六年刊行予定) 参照。

〈キーワード〉 慧遠、『大乘義章』、行性、理性、基、『宝性論』、『仏地経論』、『大乘莊嚴經論』、十義、六相 (駒澤大学非常勤講師)

of the *Jinzang lun*.

14. A Study of Xíngxìng (行性) in the *Dacheng yizhang* (大乘義章)

OKAMOTO Ippei

This essay is an attempt to hypothesize the original Sanskrit word and general idea behind Xíngxìng (行性) in the *Dacheng yizhang* (大乘義章) written by Huìyuǎn (慧遠).

The original word behind Xíngxìng is equivalent to *vṛtti* of *tathāgatagarbha*'s category No.6 in *Ratnagotravibhāga* (寶性論), and the idea of Xíngxìng is the rolling *dhātu* (性) into the three characters, that *prthagjana* (凡夫), *ārya* (聖人) and *sambuddha* (如來). (This *dhātu* is one and only existence for these characters)

Later, the monks of the *Fǎxiāng sect* (法相宗) changed the meaning of Xíngxìng from *dhātu* to *gotra* (種性), and gave the word Lǐxìng (理性) to *dhātu*.

The original meaning of Xíngxìng was disappeared and the monks of the *Fǎxiāng sect* could keep the thought of *tathāgatagarbha* at a distance.

15. A Study on the 7th chapter of the Benevolent Kings Sūtra (*Jin-Wang-ching*)

MIZUNO Sōhei

This article concerns a problem in the 7th chapter of the Benevolent Kings Sūtra. I examined the former half and latter half of this chapter, and examined important terms seen there. Several original translation terms are found in the former half, and several terms with a strong influence of Taoism in the latter half, which are also seen in the other chapters. It has come to be clear that the former half and latter half of the 7th Chapter were separately produced. So the Benevolent Kings Sūtra seems to have undergone various stages in the compiled process. My conclusion is that the former half was inserted in this sutra, after translating some original Sanskrit portion into Chinese. The latter half was clearly compiled in China. Therefore, it can be guessed that the 7th chapter was added to the Benevolent Kings Sūtra that